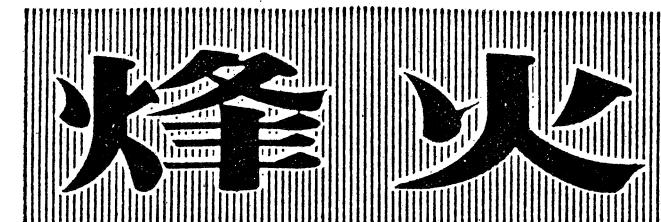


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争一世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1976年
7月15日
第304号
編集発行人 高木一夫
一部 150円



共産主義者同盟（全国委員会）

大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄川崎町
3の24 とみやビル15号
TEL (06) 371-3706

日米帝の侵略反革命戦争遂行体制を打ち碎け？

7・8安保協—防衛協力委設置粉碎!!



1.17皇太子沖縄再上陸阻止闘争に決起する反帝戦線

① 民族解放—社会主義勢力の前進と帝国主義の危機

昨4・30ベトナム完全勝利以降の情勢の推進は、現代過渡期世界の基本的特色たる「戦争と革命の時代」をますところなく示している。この戦後ヤルタジユネーブ体制を打碎いた民族解放—社会主義勢力の前進は「社会主义革命の前夜」としての帝国主義支配体制の危機を生み出しているのであり、その意味では、一九一七年ロシア革命以降、帝国主義の時代でありながら、世界プロ独への移行が端緒的に開始されたという点に根拠をもつてゐるのであり、單なる植民地主義支配体制の崩壊にとどまらない世界的危機である。この様な民族解放—社会主義勢力の闘いの前進に対して、就中その主戦場たるアジアに於て、それの反革命的撃破が文字通り帝国主義支配体制の死命を決する攻撃として日米帝によつてかけられてきている。

七・一七、皇太子沖縄上陸阻止—海洋博粉碎の決死的闘いが、姫百合、白銀において闘いぬかれて以降、一年の年月を経て、今日、日米帝の沖縄侵略反革命前線基地強化の攻撃の反革命的姿が、全面的に明らかとなつてきている。

昨年末に、発表された、新太平洋ドクトリンは、前進戦略にもとづいて、沖縄を、朝鮮半島に対する、直接的出撃拠点として設定するとともに、日米韓反革命体制の要としての沖縄基地の戦略的重要性の増大と強化を公言した。

このような中で、七二年沖縄「返還」—五・一五体制—皇太子沖縄上陸—海洋博開催として、おし進められてきた、日帝の一連の攻撃の本質が、沖縄軍事基地の強化と、そして、

□第一章□

危機にたつ、日帝の南朝鮮新植民地主義支配の要、沖縄侵略反革命前線基地の再編強化を打ち碎け！

ソ連社帝はこの様な帝国主義支配体制の危機を生み出したアジアに於ける民族解放—社会主義勢力の闘いの前進に對して「アジア集団安保構想」等に於ける中国に對する軍事的

沖縄人民の侵略反革命への天皇制・天皇制イデオロギー攻撃を頂点としての動員であることが、増え、鮮明なものとなつてゐる。

なかなか、社共は、全面的な武装解除をおこない、沖縄人民の闘いを、労働組合運動のなかに封じこめんとしている。革マル派もまた同様である。

日本階級闘争の要—沖縄解放闘争の未来の一切は7・17～1・20に至る海洋博粉碎—皇太子沖縄上陸阻止を唯一闘いぬいた、沖解同と、我々の沖縄現地に於ける、同盟建設の前進にその一切の運命が委ねられているのである。

西九州—沖縄を貫いて、断固として闘いとらなければならぬ。

**7・17 関東・関西・九州・沖縄で
一斉決起し、沖縄解放闘争の
更なる前進をかち取れ！**

1976年7月15日

烽火

封じ込め「南北クロス承認」にみられる朴独裁政権の承認等、を通じてこれに対する封殺を目論むとともに、革命後の民族解放―社会主義勢力の国内経済建設をめぐる援助等を通じてこれらの闘いの社帝潮流への変質を目論んでいる。この様な中で中国共産党の反覇権にみられる朝鮮労働党、ベトナム労働党との闘争の提起は、一方における日米安保肯定論に深刻な矛盾を生み出すとともに、社会主義建設においても経済建設においてもソシ帝のヒモ付き援助を批判するという内政不干渉の決定的限界を孕んでいる。

日米帝はこの様な戦後ヤルタジユネーブ体制の崩壊以降の新たな情勢の中で、市場再分割戦に向けた強盗的抗争を孕みながら昨4・30ベトナム完全勝利以降は、文字通り戦後帝国主義支配体制の死命を決するものとして新たに日米韓を中心とした反革命体制の再編―強化を目論むとともに、南朝鮮新植民地主義支配の強化を朴軍事独裁政権に対する徹底したテコ入れを通じて、この民族解放―社会主義の闘いをインドシナに封じ込めソシ帝とともにこれの変質を目論んでいる。

②日米帝の侵略反革命戦争遂行体制を打ち砕け！

米帝はアジアにおける民族解放―社会主義勢力の前進に対し「韓国からの撤退はアジアからの最終的撤退を意味する」としてアジアにおけるインドシナにかかる軍事拠点を、朝鮮半島に据えるとともに、日米韓反革命体制の再編―強化の策動を戦後帝國主義支配体制の帰趨を決する攻撃として凌いばかりの勢いで進行させている。

米帝は4年フォード来日訪韓訪ソ、更には75年「国防白書」に典型的な様にインドシナに於ける敗北を見越した上で、ベトナムにおける「敗北の教訓」と更には8年の石油戦略の展開以降激発する第三世界における資源自決の闘いが、民族解放闘争と結合する事によって戦後帝國主義の新植民地主義支配体制の生命線を脅かす事を直感し、米軍の直接介入(キッシンジャーの海兵隊による中東油田占拠策動)と核使用を公言化する事を通じて、これら闘いの暴力的封殺を目論んだのである。75年初頭の、「75年国防白書」は例の悪名高き「前進戦略」を発表し、アジアにおいては朝鮮半島を最前線とし、沖縄を陸・海・空にわたるストロングポイントとして在沖米軍を、それを支援する「バック・アップ・フォース」(後方支援軍)として位置付ける新アジア戦略を定式化した。

更に、この戦略を遂行していく上で日米関係が、就中日米安保に基く日米共同軍事行動の締結と更には在日米軍基地の安定的、かつ自由使用が決定的であると主張され、日米安保同盟の反革命的強化が目論まれたのであ

る。それ故に米帝は、ベトナム完全勝利の直後におけるシユレジンジャーによる戦術核の朝鮮半島における先制使用の公言、更には、悪名高き第一軍団司令部ホーリングワースによる△九日間戦争計画▽etcにおいて、朝鮮半島における侵略反革命戦争の挑発を開始すると共に、8月三木一フォード会談による△新韓国条項の再確認▽、そして、坂田一シユレジンジャーによる一連の日米防衛分担に向けた軍事会談の積み重ねが開始され、更に、△九月14～15日において、日韓定期閣僚会議が強行されたのである。

昨年十二月にフォードによつて発表された△新太平洋ドクトリン▽は、米帝のベトナム完全勝利以降の新アジア戦略の反革命的姿を鮮明とした。

それは、第一に、「朝鮮半島の平和と安全保障に与し続ける」として、引き続き朝鮮半島への侵略を公言すると共に、第二に、△韓国条項▽の再確認の下に、日帝のこれに対する政治的・軍事的・経済的協力を最重要環としている。

そして、この戦略の遂行にあたり、米国務省ペスト政治・軍事問題局長は、3月25日、「米国が核兵器使用の能力と意志を持つこと」が、米帝の戦略にとって必要であるとの反革命的宣言を行うに至るのである。

このような米帝の新たなアジア戦略の展開の中で、六五年日韓条約締結―六九年日米共同声明、七二年沖縄「返還」以降、アジア侵略反革命の支柱として、南朝鮮新植民地主義支配の完成化をもくろんできた日帝は、それへの積極的加担を通じてしか、このアジアにおける民族解放―社会主義勢力に対する対決をなし得ず、同時に、自らの帝國主義的延命をそこに見いださざるを得ないのである。

すなわち、七四年文世光事件以降の椎名メモ、更には、△北の脅威▽△南侵論▽を追認しての△韓国条項▽の確認等々の一連の対応は、ベトナム勝利以降の新たな反革命体制の布石として存在していたのは、今日もはや全く明らかである。

このようない日本帝國主義の攻撃は、一方においては、朴軍事独裁政権に対する徹底したテコ入れと、そして、7・4南北共同声明以来の朝鮮民族の平和的・自主的・祖国統一の闘いに対する真向うからの敵対である。これに對して、昨年における朝鮮労働党は、「戦争によって失うのは、軍事境界線のみである」(金日成発言)として、かかる日米帝の侵略反革命との全面的対決を鮮明とすると共に、韓国においては、金芝河氏の闘い、更には、民主救國宣言、そして、在朝鮮人・韓国人の決死的闘いが開始されている。

現在、日米帝國主義は、昨年における一連の防衛会談を積み重ねながら、戦争挑発行動をくり返し、朝鮮半島における緊張を生みだしている。すでに、昨年8月における三木一

フォード会談において、「韓国の安全は、日本の安全にとつて緊要」という韓国条項が再確認され、坂田一シユレジンジャー会談において、△有事の際の在日米軍基地の安定使用▽、△日本からの米軍発進の確認▽の合意、△日米韓共同軍事行動の具体的推進が開始されている。

その具体的な内容とは、△日本の武力攻撃に対する狭義の日米防衛分担▽にとどまらず、△極東の平和と安全▽のための戦闘行動にまで拡大している。更に、従来の自衛隊にとつて、かかる戦闘行動の拡大の中で、弱体となつてゐる海軍力・空軍力の強化は、なんなら△対潜哨戒機能▽の強化は、本年初頭の、ラムズフェルドの△国防報告▽etcにおいても指摘されている。ロッキード問題で浮かびあがってきた次期対潜哨戒機PXLの導入は、かかる日米共同作戦体制にとつて不可欠のものとして存在しているのである。

日帝は、かかる形で、一方においては、六年五日韓条約以降の援助・借款を通じて、韓国経済を七三年に至る過程で全面的に支配し、新植民地主義支配を打ち固めると共に、今日にあっては、以上のようない日米韓反革命体制の強化を通じた自衛隊の直接出撃をもくろんでいる。更に、日帝は、△戦力増強五ヶ年計画▽なる朴の戦費捻出に對して、積極的援助を行うと共に、それとどまらず、「韓国に対する武器輸出・兵器国产体制に対する援助」(三菱・河野発言)がなされており、今日進められている△装備国产化計画▽兵器輸出の対象が、朴政権であることは公然たる秘密である。

③日米帝の沖縄侵略反革命 前線基地強化を打ち砕け！

現在、この日米帝による南朝鮮新植民地主義支配の維持にとつて、沖縄の侵略反革命前線基地としての強化は、この日米韓反革命体制の決定的要として存在している。

その第一の攻撃は、沖縄基地のストロングポイントとしての確立に向けた軍事機能の再編―強化であり、在韓米軍との連動の強化である。すでに、日米帝は、七二年沖縄「返還」△15/15体制を決定的足がかりとし、昨年11月、そして本年におけるグアムからの台風避難を口実としたB2の沖縄への飛来。ここの一年において、在沖米軍のファンтомは二倍以上に増大し、ベトナム完全勝利以降、東南アジアから撤退した空軍力を、沖縄に集中させたことを意味している。そして、これまで

岩国に展開していた第一海兵航空師団を、沖縄第三海兵隊と統合しており、これらの攻撃

第三海兵隊に結合しており、これらの攻撃は、何よりも沖縄における空軍力の強化と、更に、直接上陸部隊たる海兵隊の増強は、在沖米軍の臨戦機能の徹底した強化が進行していることを意味している。(口)として、このような攻撃は、本年において、すでに、ヘコープストライフ（3／5）、ヘイエロードラゴン（3／8～18）、ヘモウレックス（3／25～4／21）、ヘビーマンチエリー（6／28）の四次にわたる米韓軍事演習を強行している。これは、沖縄を出撃拠点としたヘ太平洋ドクトリン（9日間戦争計画）の具體化であり、米日韓合同の朝鮮半島における侵略の演習は、単なる演習にとどまらず、モウレックス作戦時の韓国におけるヘ民防衛訓練やヘ対スペイ作戦、ヘ郷土予備軍訓練に連動し、4月1日における軍事境界線東部における鷹峰での共和国に対する銃撃、更には日本自衛隊のヘソ連機侵入を口実とした4月10日におけるスクランブル etc 、日米韓一体の戦争挑発行動として進行させられている。

更には、原潜母港としてのホワイトビーチの戦略的重要性は、決定的なものとなつてゐるのである。(六)として、総じてこれらは、新太平洋ドクトリンにもとづく九日間戦争計画の具体化として進行しておる封じこめにとどまらず、朝鮮半島に対する侵略反革命戦争遂行体制として存在しているのである。

このような米帝のアジア侵略、なかんずく

日米韓反革命体制の、今や決定的要となつた
日帝の侵略反革命の推進は、七二年沖縄「返
還」—七五年海洋博、皇太子沖縄上陸を通じ
て、沖縄の侵略反革命前線基地強化に向けた
徹底した攻撃として存在している。

すでに日帝は、七二年沖縄「返還」—5/
15体制を通じた沖縄自衛隊派兵、そして、安
保協一防衛協力委 etc。を通じて、日米安

保同盟の強化、なからんずく、自衛隊の飛躍的強化とその行動範囲の拡大を行ふと共に、日米韓反革命体制の枢軸を担うべく、沖縄のストロングポイントとしての戦略的機能の維持・強化と結合して一連の攻撃を開始している。その第一は、沖縄における自衛隊配備の強化である。今日、沖縄における総兵力は五百五百であり、旧式化したF-104Jにかわる

ファントムの配備、更には、対潜能力の拡大防空体制、後方支援体制の確立、護衛艦の配備 etc. が進行しており、先日のGTS 認可に伴う中城湾における対潜哨戒を目的とした大型護衛艦の配備計画 etc. 矢継ぎ早やに開始されており、名実共に、日米安保同盟の軍事的支柱たる沖縄における自衛隊強化を

その第二は、
推し進めていく。

化に向けた攻撃である。何よりも、昨年以来の一連の防衛会談の積み重ねの中で行われたものゝ、來年5月14日に期限切れになる「公用地暫定使用法」に変わるものとして準備している、「沖縄県の区域内に所在する駐留軍用地等の境界の明確化等に関する特別措置法」は、基地確保法案である。この法案は、「沖縄戦來の混乱した地籍を明らかにする」ことを名目に打ちだされているが、現在、「公用地暫定使用法」によつて暫定的に強制収用している米軍基地、及び自衛隊基地のうちの、約半数の四〇ヶ所^{数を設}の地籍を明らかにし、そのことをもつて、日帝との契約を拒否している反戦地主を解体し、自衛隊基地に関しては、土地収用法、米軍基地に関しては、「日米地位協定の実施に伴う土地等の使用等に関する特別措置法」を適用し、文字通り、「暫定的」ではなく、日米侵略反革命前線基地の恒久的、安定使用を行うための本格的土地強制収用法である。

「軍事基地に終わる」べく、軍事基地に徹底して従属せしめ、いわゆる基地社会として打ち固めるものであった。日帝の沖縄支配の要たる沖縄振興開発計画の起爆剤として打ちあげられた海洋博は、その頂点をなすものである。「海——その望ましい未来」「工業立県・観光立県の起爆剤」の美名の下に強行された海洋博は、海洋博関連事業によって、北部の基地網を直結する北部縱貫道路建設、北部—南部の基地網を結ぶ5号線の整備等々、CTS（石油備蓄基地）建設による日米軍事基地への石油燃料補給基地建設を行つてゐる。「本土」「製糖資本への農地の集中を条件にして、資本的キビ作大經營でもつて甘味資源を自給化することによつて、農漁民から土地をハク奪うる農業政策と併せて、暴力的に農地・漁場をハク奪し、沖縄農・漁民を労働者として雇用するのではなく、「本土」、中南米への

叩き出しを狙う棄民化政策を推し進めていた
なおかつ、米軍相手の第三次産業を、「本土」
「資本の進出とそれにともなって、「本土」
「観光客相手になしくずし的に切り替え、米
軍人、「本土」観光客の「買」春観光を推進
するものとしているのである。文字どおり、
海洋博は、「基地とCTSと『買』春観光の
島」への起爆剤でしかなかつたのである。そ

して、このような日帝の攻撃の中で、沖縄における失業率は、七~~四~~%をこえているのである。

■スケジュール■

七月十日
垂青闈告發六局年關西集会
六時
大坂放賑公館(深)

東坡全集

一時
千葉地裁

七月八日 安保協—防衛協力委設置粉

中央總決起集會

「松原パークレン」差別デツ

争闘彈糾判裁判

七月一七日 7.17 四戰士奪還・反天皇

「反大和・反基地・反天皇」意識が、闘う沖繩人意識として沖繩人民の中に広範に形成され、五〇年代土地闘争の革命性を堅持し、六〇年代において、社会排外主義者、社共の「復帰運動」への路線的歪曲があつたといえ、七〇年代を前後して爆発・昂揚した反戦・反基地勢力との結合を深めてきた。日米帝の沖繩支配との非和解的闘争として発展してきたこの闘いの昂揚に対し、日帝は、天皇制・天皇制イデオロギーを最後の切り札として持ち出し、沖繩人意識を解体・吸収せんとした。なおかつ、社会排外主義者一社共、革マルを帝国主義の「左足」として脅威し、反戦・反基地勢力を圧殺し、もって沖繩人民をアジア民族解放→社会主義勢力や、「本土」労働者人民と分断し、南朝鮮新植民地主義支配→他民族抑圧への総動員と官僚的警察的独裁体制の下への暴力的組みこみを行わんとするものであった。これらの攻撃の頂点をなすものこそ、沖繩戦の最大の激戦地たる南部戦跡「参拝」と、米軍の演習が日夜最も激しく行われている伊江島を起点とする戦犯天皇の嫡子皇太子アキヒトの沖繩第一次・第二次上陸であった。

このよう、日米帝の新たな反革命戦略の決定的要とし、前進戦略にもとづき朝鮮半島における侵略反革命戦争遂行の拠点として、沖繩の侵略反革命前線基地の強化が進行している。この日帝の攻撃は、七二年沖繩「返還」—5／15体制を決定的足がかりとして進行したのであり、七二年当時におけるこの沖繩「返還」協定に対する闘争が、ベトナム労働党、朝鮮労働党を先頭に、アジア人民の激しい闘争と同時に、反日（帝）闘争の導火線となつたことをみる時、我々は断固として、この日米帝の侵略反革命戦争遂行体制の確立の

攻撃を打碎かなければならぬ。

我々は今も一帝國主義の側面反革命
立会帝国主義の武装反革命を分担し、世界革命

日本帝国主義の武装反革命を粉碎せし世界大戦争—世界プロ独を組織する世界单一党を

国際階級闘争の最前線に組織せよ」、一民族解放—社会主義勢力の前進と結合し、日帝の

侵略反革命を内戦に転化せよ」、「革命的労動者人民は、共産司（全国委）に結集し、プ

ロレタリアートの武装蜂起—プロレタリア独

海洋博粉碎闘争と皇太子沖繩上陸阻止 闘争の地平

1
7.
17.
1.
20
闘争の地平

をうけつぎ、沖解同建設
を闘いとれ！

我が同盟（全国委）は、日米帝のかかる攻撃に対し、七四年5／19 海洋博開催地本部町において、沖縄解放同盟と共に、海洋博推進派本部町商工会と「県」警機動隊の反革命十字砲火を突破し、海洋博に反対する北部農漁民との結合を追求し、海洋博粉碎闘争の烽火を打ちあげた。同年7／20、「海洋博闘争の必要性はわかるが、沖縄に行くべきではない」とする右翼日和見主義者＝自決派を指弾し、沖縄一、「本土」を貫ぬく海洋博粉碎闘争を組織し、その成果をもつて、七五年一月「海洋博粉碎！天皇・皇太子沖縄上陸阻止」本部現闘団を設置したのである。

民と結合した海洋博粉碎闘争の着実な前進の上に立脚し、沖縄戦の激戦地である摩文仁丘に占拠する「本土」慰靈塔に、「戦犯天皇糾弾！皇太子沖縄上陸阻止！」と大書し、6／18 摩文仁糾弾闘争に決起した沖縄青年の檄を受け、沖繩戦戦没者の死を「殉國の死」とする6／23日ノ丸慰靈祭粉碎闘争を組織し、7／17（7／20 海洋博開幕式粉碎、皇太子沖縄上陸阻止闘争に突入したのである。社会排外主義者一社共は、△平和産業誘致△に基づいて

て、海洋博開催に双手をあげて賛成し、「皇太子の個人的来沖には反対しない」との声明を発表し、七二年沖縄「返還」以来の、海洋博一皇太子沖繩上陸という日帝の決定的攻撃の前に、ただ一つの合法デモすら組織するとなく、その反革命的本質をさらけ出した。

ない事を決め、一方の社会排外主義者—革マルは、「天皇制との闘いはアナクロニズム」と言いくるめ、「県」労協反対派に純化した

戦犯天皇の嫡子皇太子アキヒト・ミチコは天皇主義者一屋良を先頭に、「本土」機動隊四千名を動員し、百余名にわたる「障害者」狩りを行うという戒厳令体制を敷き、唯一決起した沖縄同一「本土」共闘に対するマンツ

ーマンの尾行、白色テロという一四時間の監視体制をとり、社会排外主義—社共・革マル、「県」労協龜甲一峰原を足場に、沖繩上陸を放同盟戦士と「本土」青年の決死糾弾闘争に果さんとした。だが、南部戦跡の姫百合の壊、糸満市白銀病院からの火炎ビンによる沖繩解放大破算を全人民の前に明らかにしたのだ。

7／17～7／20の激動を通して、我々が獲得した地平は、第一に、復帰協運動の中で食いつぶしてきた復帰協「県」労協指導部の破産に対し、七二年沖繩「返還」以来の日帝の沖繩支配の中で、沖繩戦を思想的原点にした「反大和・反基地・反天皇」意識が、闘う沖繩人意識として形成されつつあることに依拠し、沖繩階級闘争の再編の端緒を切り開いた事である。

第二の地平は、「『本土』労働者は、沖繩に行くべきでない」とし、沖繩人民に孤立を要する右翼日和見主義者—自決派を粉碎し、沖繩—「本土」を貫ぬく沖繩解放闘争によつてしか、沖繩問題の根本的決着がないことを鮮明にした事である。第三の地平は、總じて、これららの闘いの一切の政治的組織的地平を、社共、革マルとの断固とした対立を通じて、沖解同建設に結実させんとしたのである。

この7／17～7／20皇太子沖繩上陸阻止、海洋博開幕式粉碎闘争の地平を受けつけ、12／6～7日本ナショナルデー粉碎闘争を突破し、1／17～20第二次皇太子沖繩上陸阻止闘争、海洋博閉幕式粉碎闘争を準備したのである。

海洋博の大破算を目撃し、昨4／3サイゴン解放の波頭を受けた南朝鮮人民の闘いの前進の前に、米帝の新アジア戦略に相呼応した日帝は、なんとしても、南朝鮮新植民地主義支配—侵略反革命戦争体制の一挙的強化をはたすべく、米軍の核模擬爆弾投下訓練、実弾射撃が最も激しく行われている伊江島に、皇

裁を組織する中央集権非合法党建設を戦取せよ」「南朝鮮新植民地主義支配・沖繩侵略反革命前線基地粉碎！安保粉碎！日帝打倒！」
「日帝の侵略反革命の要＝官僚的警察的独裁支配粉碎！」「社共排外主義政権構想を打碎き、右翼日和見主義を粉碎せよ！」の下に闘いとり、「本土」－沖繩を貫ぬく单一の階級闘争の発展を、沖繩解放闘争の国際主義的發展をかけて闘いとらなければならぬ。

太子第二次上陸の地点を定めたのである。かかる、皇太子の第二次上陸に對して、社会排外主義者日共は、「トロツキストの挑発を許すな」とばかりに、自警団のイデオローグとしてたちまわり、県労協亀甲一峰原は「7／17闘争の総括がなければ動く事が出来ない。単産労組ごとの闘争は許可しない」として、革命的青年労働者の決起を圧殺したのである。社会排外主義者の他方の極である革マル派は、「7／17闘争の破産をとりつくろうために、一日動員のカンパニアとして、本部町でのデモを打ち、1／17～20闘争から召還した。

われわれは、日帝の南朝鮮新植民地主義支配—侵略反革命戦争に向けて、沖縄の日米侵略反革命前線基地が強化されている事を徹底して暴露し、民主連合政府構想にもとづき、50年代土地闘争の革命的戦争を通じて、「総合農政—民主農政」路線へ集約する社会排外主義者—日共との路線的闘争を通じて、伊江島真謝、西崎農・漁民と、海洋博に反対し、皇太子歓迎日ノ丸動員を拒否した北部農・漁民との連帯を克ちとつた。我々は権力の、伊江島に「本土機動隊」^{アーリー}余呑を動員し、アパートローラ作戦で、農・漁民一人一人を土下^{アーリー}ト^{アーリー}17／18両日、伊江島定期船を制限、伊江島村長による革命派の乗船拒否^{アーリー}しての戒厳令体制を粉碎し、1／17～20皇太子沖縄上陸阻止、闘争、海洋博閉幕式粉碎闘争を貫徹した。の勝利的平地第一は、昨7／7闘争によつて闘う沖縄人意識に大胆に依拠し、沖縄階級闘争の再編の端緒を切り開いた地平の発展の方向を、沖縄解放闘争の路線問題として明らかにしきった事である。すなわち、沖縄の日帝支配の本質が、日米帝の朝鮮侵略反革命体制に向けた、日米侵略反革命前線基地の強化にある事を徹底して暴露し、社会排外主義者—社共、革マル等の沖縄闘争終焉論と路線闘争を通して、50年代土地闘争の革命的伝統を堅持する反戦・反基地勢力との結合を深め、安保—沖縄「返還」協定粉碎、日帝倒打、沖縄解放の戦略的路線によってしか沖縄問題を解決しない事を鮮明にした。

2 沖縄解放闘争の現段階

について

海洋博閉幕式、皇太子第二次沖繩上陸以降

の沖縄への日帝の支配は、より一層う暴力的に進行し、沖縄全島において、闘争は激化している。日帝の侵略反革命前線基地の強化の先制的攻撃として、72年5／15沖縄「返還」をもつて施行した「公用地暫定使用法」の

来年5／14期限切れを控え、日帝は、本格的な軍用地収用に乗り出そうとしている。それは、通常国会に上程せんとしていた「沖縄県の区域内に所在する駐留軍用地等の境界の明確化等に関する特別措置法」＝基地確保法案によつてである。この法案のねらいは、本格的な軍用地収用をねらつたものだけではなく、
「沖縄戦争の混乱した地籍を明らかにする」ことをもつて、米軍基地及び、自衛隊基地の約半数である40施設の日帝との契約を拒否している反戦地主を解体する事を意図しているのである。

反戦地主は、3月中旬に、反戦地主会を結成し、日帝を相手に「公用地暫定使用法」の裁判闘争を組織して、反戦、反基地勢力の総結集をよびかけている。だが、社会排外主義者一社共は、この裁判闘争を、①特措法を自治体に運用する時、自治体住民の住民投票を行ふと憲法銘記もさされている事、②軍用地が公共施設にあてはまるのかを問題にして、③合憲・違憲論議に封じ込めようとしており、これとの闘争を抜きにして、「公用地暫定使用法」特別措置法＝基地確保法粉碎、日米軍事基地撤去の闘争の飛躍はありえない。

第二は、日米侵略反革命前線基地の維持・強化をねらつたCTS（石油備蓄基地）建設である。社会排外主義者一屋良は「自らの在期中にCTS問題は処理し後継者に負担をかけない」とばかり、6月22日、CTS竣工認可を强行し、前社大委員長一平良幸一新知事は沈黙をきめ込み、屋良を繼承することを宣言したのである。すでに「金武湾を守る会」は、昨年の山口反動判決に対し、控訴審闘争に決起し、革命的青年労働者を結集して、実力闘争の陣型をうち固めている。同時に、中城湾の石油基地化計画＝中城湾開発構想に対する、中城湾住民のねばり強い闘いが開始されているのである。

このような、七・一七以降の攻撃の中で、74年来の沖縄解放同盟と我同盟をはじめとする「本土」共闘の海洋博粉碎＝皇太子沖縄上陸阻止の激闘は、「返還」以降の祖国復帰勢力の分解と、日帝による各個撃破＝社会排外主義の育成の中にあって最前線を形成した。

我々は、七・一七以降の権力とのより一層の激しい攻防にうちかちつつ、1／17～20にいたる過程を勝利的に闘いぬいた。このことは、単に戦術的問題ではなく、それを裏づけた、政治的路線の正しさの問題としてあつた。

第一に、沖縄の国際主義的位置の問題である。沖縄は、一方で、日帝の敗戦処理の「矛盾のはけ口」として、米帝に売り渡された。そして米帝とそれへ屈服したソシ帝によって成立した戦後ヤルタジユネーブ体制下の民族解放＝社会主義勢力に対する巨大な軍事要塞として形成された。この米帝による軍事植民地支配は、基地社

会として無制限の圧政、そのもとへの従属としてあり、沖縄人民の闘争は、自らの力のみによって、一步一歩、民主的権利と、生活の防衛を闘いとつてきた。この闘争は、不可避に、国際主義的連帯の精神で自らを武装することなしに勝利を展望できないものとしてあつた。60年代の復帰運動はベトナム反戦闘争との結合をめぐる再編をなしえず、敗北したし、現在、日米帝の朝鮮半島にむけた、侵略反革命戦争遂行体制の中で朝鮮人民との連帯をかけて、沖縄人民の諸矛盾の爆発をその国際主義的精神でもって、日米帝の基地の撤去へときりぎりと発展させていく指導勢力こそ要請されているのである。

第二にそのことは、戦後沖縄階級闘争の中における復帰運動の果した役割とその今日的継承を問うものである。60年代末の復帰運動の変質と分解は、同時に支配層をもまきこんだ全島的な運動の空洞化と分解の開始であり、60年県労協結成以降の比率は少いとはいえる組織された労働者階級の前進と「本土」新左翼運動の息吹きをもたらし、復帰運動の階級的転換の条件を形成して対極に沖縄の「支配層」は日米帝とのゆきを進行させた。しかし、少なくともこの傾向は「返還」以降も加速度的に進行していることは明らかであり、革マルの如くプロレタリアートの理論化による「労組運動の左翼的推進」でなされることはまた復帰運動の戦術的突破でもなれないし、沖縄ブルジョア階級を実体的に確定しているわけではないが）沖縄の先進的プロレタリアートは、日米帝の打倒において闘う「本土」人民との團結のもとに、社会排

□第三章□

社会排外主義の敵対を粉碎し、沖縄解放闘争への歪曲を打碎け！

1 沖縄闘争の「革新」自治体

の選挙戦の中で、社共、そして社大党は、「核も基地もない沖縄」という従来のスローガンさえも後景に退け、「住みよい沖縄」なるキャッチフレーズでもつて農業振興、失業問題等へのバラ色の夢をぶりまき、それら諸問題に我々に、帝国主義者の補完物としての排外主義・社会排外主義、それに屈服した部分との断固たる分岐を鮮明にし、それに対する沖縄＝「本土」を貫いた党派闘争の強化を重要な課題としてつきつけている。

6月の知事選、「県」議選は、七二年沖縄「返還」～七五年海洋博・皇太子沖縄上陸として激動した沖縄人民の闘いと、「復帰」以降、進行した日帝の沖縄政策に対する圧倒的な憤慨の増大を、それなりに示している。こ

外主義者を一掃しつくし、また沖縄の「支配層」との断固たる分岐をかちとり、基地社会として生ずる諸矛盾の激成を、沖縄プロレタリアート人民の国際主義的任務を果すべく、首尾一貫して發展させていかねばならないのである。

そして沖縄階級闘争はこの点において、米軍の基地としての農地の暴力的收奪と基地労働によって基地との全面的敵対を強制され、また、反大和＝反天皇感情を根深く蓄積している農民との労農共闘としての大きな条件を与えているのである。

第三に、沖縄における「民族」問題を積極的に位置づけるとともに、総路線の下に正しく發展させることである。沖縄人民の闘争をつらぬき、その契機をなして反日意識は日帝の差別・抑圧・奪奪の結果であり、またそれに屈服してきた「本土」人民への痛烈な糾弾である。それは決して沖縄人民が、日本民族か沖縄民族かという論議にゆだねられる問題ではなく、また、固定的、静止的なものとして論じられるべき問題でもなく、具体的な階級闘争の中において沖縄労働者人民の国際主義的任務に従属させて發展させねばならない。この観点を見失う時、沖縄の歴史は日帝の沖縄差別、抑圧の歴史に一面化され、その解放の闘いの歴史を無視し、解放の条件と主体を明らかにすることができず、ブルジョア民族主義との分岐をあいまいにしていくのである。また「本土」プロレタリア人民にとっては最低限の任務であり、75年沖解同と「本土」共闘は、海洋博＝皇太子上陸阻止闘争を決死的闘争としてこのことを身をもつて実践し、第一歩を記したのである。

る。その意味で、我々はレーニンが共産主義者の党派闘争の中心環として民族自決権問題を設定したことを、現代過渡期世界の共産主義者として継承しなければならないし、それは復帰運動の到達点及びそれとの関連における日本共産主義運動の具体的、歴史的総括の中で取り扱う以外にはありえないのである。

それに全く触れるこの加納一派の「琉球解放」の転換の実践的意図は明らかであろう。彼等の我が同盟からの脱落以降、一貫して沖縄で流布して来た権力問題ぬきの「沖縄解放はプロ解放の不可欠の一環」論と帝国主義批判の資本主義批判の解消によるプロレタリアートの経済主義的把握、そのことによる実践的には沖縄の革マル派への憧憬等々の大破算とその手直しを物語っているのである。従来の立場に彼らの「綱領の実践的部分(?)」として接木し、実践的には前者に不動の確信をもつて後者をせつせと労働組合に流布して

回ることにしかならないのである。

我々は、この様な社会排外主義者による沖縄闘争の全面的歪曲、なかんずく「革新沖縄の防衛」に示される排外主義政権構想への全面的歪曲、更にますます強化される日帝の沖縄支配の攻撃の強化に対して部分的にしか対応しない急進民主主義者の全面的破算を更に暴露し、対決しなければならない。

沖縄解放闘争は、日米帝国主義のその攻撃の性格からして、帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を國際階級闘争の最前線に組織せよ！

民族解放—社会主義勢力の前進と結合し、日帝の侵略反革命を内戦へ転化せよ！

革命的労働者人民は共産同全国委員会に結集しプロレタリアートの武装蜂起—プロレタリア独裁を組織する中央集権非合法党を戦取せよ！

同志諸君！ 以上の闘いの一切の帰趨は、我々の同盟再建の前進、就中沖縄における同盟建設の前進と共に、沖縄解放同盟の建設にある事を断固として確認しなければならない。

以上の点を踏まえて当面する7・17一周年闘争を、沖縄—九州—関西—関東において総決起し「支持する会」の全国的強化を闘い取らなければならない。

同志諸君！ 以上の闘いの一切の帰趨は、我々の同盟再建の前進、就中沖縄における同盟建設の前進と共に、沖縄解放同盟の建設にある事を断固として確認しなければならない。

—「本土」を貫く单一の階級闘争として闘いとり国際主義的発展を戦取しなければならない。

日帝の侵略反革命の要官僚的警察的独裁支配粉碎！

社共排外主義政権構想を打ち碎き、右翼日和見主義の合流を粉碎せよ！

のスローガン下に沖縄

右翼日和見主義者の排外主義的逃亡に抗し

6・15(首都)—侵略反革命阻止全国政治共闘結成)

—6・23(関西)安保協粉碎闘争を貫徹する！

△△△



6・23 関西総決起集会を領導する反帝戦線

我が反帝戦線(全国委)は、6・15闘争を今春期4・19—4・28—5・15—5・23闘争の大爆発を引き継ぎ、「武装蜂起—プロ独を組織する中央集権非合法党建設」を目指す共産同(全国委)党内分派闘争の決着をかけ、労働者人民を革命的に領導し、終始戦闘的に闘い抜いた。

今日、ベトナム南北統一選挙—統一政府樹立、更には、ラオス王制廃止、カンボジア人

全国の闘う労働者人民・「烽火」読者諸君

民代表者大会の成立等、昨4・30ベトナム完全解放以後のひき続く民族解放—社会主義勢力の大前進は、不可避に帝国主義の延命をかけた侵略反革命と市場再分割戦の激化、社会帝国主義の武装反革命の抬頭を引き出し、これらとの非和解的対峙を一層強め、「世界革命戦争—世界プロ独」によつてしか決着づかない、まさに「世界的な規模で資本主義から社会主義へと現実的移行が開始された時代」故の「革命と戦争の時代」を形成している。この中につけて日本帝国主義は「アジア唯一、最後の帝国主義」としての自らの危機を、アジア侵略反革命と南朝鮮新植民地主義支配の一層の強化をもつて乗り切らんとし、その中で不可避に激化する民族解放闘争に対し、日米安保—米日韓反革命体制の打ち固めをもつて一挙的突破をはからんとしている。

この「日米安保協・防衛協力委設置」策動にみる凄まじいばかりの日帝の侵略反革命と南朝鮮新植民地主義支配の貫徹は、帝国主義国内労働者階級人民の国際主義的任務を鮮明に突きつけているし、またそれを領導せんとする党派のプロレタリア国際主義の内実を籠にかけざるを得ない。社共・革マル・社会排外主義者共は、ロッキード問題を汚職問題に落し込め「椎名の三木おろしを糾弾し、三木の手によって真相糾明を！」と、三木の支持を労働者人民に呼びかけ、社帝・日共を先頭にして労働者階級人民に帝国主義の反革命策動からの武装解除を強要した。この社会排外主義者共の一層の反革命への転落に對して右翼日和見主義者共は、帝国主義の侵略反革命と官僚的警察的独裁支配の強化に対する闘いから逃亡したのみならず、社帝・日共の後追いを競い合い4トロを筆頭に「社共は労農政府樹立へ向え！」と社会排外主義の補完物でしかないことを暴露した。とりわけ我が同盟

南朝鮮新植民地主義支配—沖縄侵略反革命前線基地粉碎／安保粉碎／日帝打倒／

日帝の侵略反革命の要官僚的警察的独裁

支配粉碎！

社共排外主義政権構想を打ち碎き、右翼日和見主義の合流を粉碎せよ！

1976年7月15日

烽火

からの脱走分子—反革命加納一派は、「バラ色のプロ独の説教」で組合活動における民同との協調」を説いて回るという労働者人民を日帝の攻撃の前に武装解除させていく任務—右翼日和見主義の革マル主義への水先案内人としての姿を一層暴露した。

我々はこの社共・革マル・右翼日和見主義の抬頭を断固として打ち碎き、唯一労働者階級人民を帝国主義の侵略反革命との対決に決起させる隊列として「侵略反革命阻止全国政治共闘」を結成し、その中軸として「全国政治共闘」に結集する諸団体を領導し闘い抜いたのである。

6・15首都総力決起を勝ち取った我が反帝戦線（全国委）の精銳部隊は、政治警察の包围網を尻目に、完全武装した革命的隊列を宮下公園に登場させた。力強いシユプレヒコールが行なわれ、指揮者の笛を合図に情宣と武装訓練が開始される。武装し密集する我が部隊は政治警察一機動隊・私服の狼狽と弾圧を寄せつけず、指揮者の号令と共に部隊展開が行なわれる。やがて武装訓練が突撃訓練に変わり、旗竿が鋭く突き出される。我が部隊の登場を知った帰宅中の労働者人民が公園に駆け付け、公園は一層熱気が漲り、我々は一層6・15闘争の勝利を確信した。一方機動隊

<6・23>

闘う全国の労働者人民諸君！

6・23闘争の成果を踏まえ、今春期、日帝の侵略反革命—南朝鮮新植民地主義支配の飛躍的強化の攻撃と真向うから対決し、我が反帝戦線（全国委）と共に、国際主義の旗を高高と掲げ、最後まで闘い抜くことを呼びかけます。

「ロッキーード事件」に端を発する政府危機のさ中で、我々は、日帝—国家権力の唯一の延命策であり、帝国主義世界支配の存亡をかけた攻撃たる安保協開催を頂点とした侵略反革命戦争への具体的乗り出しに総対決し、この「革命と戦争の時代」を勝利的に戦取すべく我が部隊を総路線で武装せしめ、断固たる革命的政治闘争を組織してきた。

このようなかつて、6・23闘争は、第一に、沖縄戦終結三周年として、第二に、六〇年代日帝の侵略反革命の中心軸たる日米安保同盟締結に対する闘いとして、今日七〇年代における日本プロレタリア人民の国際主義的任務と強く結合して貫徹された。日帝は、帝国主義間戦争と民族解放闘争への二重の敗北を、「國体護持」を掲げた沖縄戦を防波堤に、二〇万沖縄人民の虐殺の上に、天皇制を「象徴」として延命し、以降、戦後帝国主義支配体制の中軸たるアジア侵略反革命体制の要として、日米安保同盟の下に、南朝鮮新植

一私服は明日の己れの運命をいやというほど見つけられ消耗しきった顔を並べている。この様な中で安保協粉碎中央総決起集会が開催された。三里塚芝山連合空港反対同盟から起された。沖縄上陸阻止・戦犯天皇決死糾弾闘争を支持を受け、圧倒的な拍手の中で反帝戦線（全国委）の同志が決意表明に立つ。我が同志は「6月闘争の一大攻防の只中で労働者階級の大部隊を我総路線の下に結集せしめよ！武装蜂起—プロ独を組織する中央集権非合法党建設の事業を更に前進させよ！そしてその一切をかけ日米安保協開催—防衛協力委設置を阻止せよ！」とプロレタリア国際主義の立場も鮮明に提起した。我が同志の発言に集会は一層盛り上がり革命的に貫徹され圧倒的なデモに移る。集会途中から雷鳴を伴なった豪雨をものともせず革命的熱気を漲らせる我が隊列とは裏腹に政治警察一機動隊の衰弱し、氣後れした弱弱しい弾圧を躊躇することなく打ち破り、密集せる武装部隊を先頭に首都を席卷し抜いたのである。

民地主義支配を土台として、その頭角を露わにしてきた。現在、民族解放—社会主義勢力の、国際共産主義運動の封殺を打ち破った歴史的前進を前に、帝国主義・社会帝国主義の世界支配再編が、この大激動の侵略反革命戦争の遂行による破壊に射程を定め、進められている時、まさに日帝はその中軸として登場せんとしている。△前進戦略△九日間戦争宣言△△新太平洋ドクトリン△△という一連の米帝を中心とした反革命宣言は、はつきりとこの事実を全世界人民の前に明らかにした。安保協開催—防衛協力委設置に具体化される昨年来の日米安保同盟の質量共の飛躍的強化は、南朝鮮新植民地主義支配を生命線とし、沖縄侵略反革命前線基地を頂点として推し進められている。国内統治形態の転換は、この一点に向けて打ちおろされている。

今こそ、「日帝の南朝鮮新植民地主義支配一沖縄侵略反革命前線基地粉碎！安保粉碎！」の国際主義的任務を首尾一貫して果さなければならない。

6・23我が戦闘的部隊は、右翼日和見主義者共の逃亡と、社共排外主義へのなだれ打つ合流と対決しつつ、大阪剣先公園において、今春期闘争の地平を受け継ぎ、革命的政治闘争を断固として貫徹した。

大阪城公園における社会党—総評、扇町公園における日本共産党ら、社会排外主義者共の「ロッキード糾弾／汚職弾劾！」という日の開港策動に対する勝利の確信が表明され集会は初めから盛り上がる。続いて関東皇太子沖縄上陸阻止・戦犯天皇決死糾弾闘争を支持する会の連帯アピール、更に諸団体の発言を受け、圧倒的な拍手の中で反帝戦線（全国委）の同志が決意表明に立つ。我が同志は「6月闘争の一大攻防の只中で労働者階級の大部隊を我総路線の下に結集せしめよ！武装蜂起—プロ独を組織する中央集権非合法党建設の事業を更に前進させよ！そしてその一切をかけ日米安保協開催—防衛協力委設置を阻止せよ！」とプロレタリア国際主義の立場も鮮明に提起した。我が同志の発言に集会は一層盛り上がり革命的に貫徹され圧倒的なデモに移る。集会途中から雷鳴を伴なった豪雨をものともせず革命的熱気を漲らせる我が隊列とは裏腹に政治警察一機動隊の衰弱し、氣後れした弱弱しい弾圧を躊躇することなく打ち破り、密集せる武装部隊を先頭に首都を席卷し抜いたのである。

からは、現闘同志が駆けつけ、関西総決起集会に結集する同志の前で、今日の鉄塔決戦が日帝の侵略反革命戦争の具体的遂行との対決であると共に、戦後農民運動の革命的転換を決する△決戦中の決戦△たること、この勝利的貫徹に向けて更に戦列を打ち固めよ！と訴える。熱気にあふれた剣先公園に、力強い我が部隊のアピールを聞きつけた労働者人民が結集してくる。そして、職場での闘争を貫徹し、密集した部隊で登場した電通労政のアピール。総路線で武装し、日本プロ人民の国際主義的任務をかけて、7・8安保協に進撃せよ！の決意表明も高らかに、同時に、総評集会にゴキブリ的に忍び込み、反革命延命策動に奔走する加納一派完全打倒掃討戦を組織していることを確認。これらの革命的同志の熱気あふれるアピールを収約し、反帝戦線（全国委）の同志による決意表明によって集会がしめくられる。我が権力奪取のスローガンと固く結合し、日帝の侵略反革命—南朝鮮新植民地主義支配と対決する革命的政治闘争を組織せよ！我が国際主義の旗の下、日本プロレタリア人民を総路線で武装せしめよ！社外主義政権構想を粉碎し、7・8安保協粉碎—防衛協力委設置阻止に総進撃せよ！

以上を、我々は6・23闘争においてはつきりと確認し、七時半に劍崎公園から戦闘的デモンストレーションをくり広げ、御堂筋、新御堂筋、梅田等々終始一貫して密集デモを行い、機動隊を打ち倒し、けちらし、闘争を貫徹し抜いたことを報告する。

我が反帝戦線（全国委）と共に、最後まで闘い抜き、△武装蜂起—プロ独を組織する中央集権非合法党△の戦取によって勝利を我が掌中にすべく、共に進撃せん！

7・7華青闘告発六周年 日帝の朝鮮侵略反革命粉碎！

朝鮮人民との國際主義的連帯をかち取れ！

「韓日交渉に反対したときの憂慮が現実となつた。日本の新植民地主義支配がはびこり、政治的干渉や経済の隸属化が増大し『第二の36年間』にならないとは断言できない。これを日韓両国民が打破すべきである。」（本年6月15日金芝河第4回公判証言より）

南朝鮮の鬪う民衆詩人金芝河（キム・ジハ）は死をも恐れぬ不屈の精神にみちあふれ、暗黒の法廷より、再びみたび我が日本プロレタリアート人民に決起の檄を発している。1875年江華（カンファ）条約にはじまる血ぬられた朝鮮侵略百年の歴史の上に築かれたる日本帝国主義の南朝鮮新植民地主義支配は極点に達せんとしている。どれほど多くの民族の統一を希求し、祖国を愛してやまぬ朝鮮人民が日米帝と朴カイライ独裁政権により闇から闇へと葬り去られ、獄につなぎとめられ、言語を絶する弾圧に晒らされてきたことか。

激化の一途をたどる朝鮮侵略反革命（戦争）こそは、体制的危機にあえぐアジアで唯一の最後の帝国主義である日帝の延命のための最大の支柱に他ならない。ロッキード疑惑と政治危機、それをめぐってうごめく帝国主義者を見よ！敗戦帝国主義日帝の復活と勃興そして危機の人為的、暴力的回避の全過程には常に朝鮮人民への徹底した搾取、収奪、民族的蹂躪が介在してきたのではないか。

世界的規模で資本主義から社会主義への現実的移行が開始された現代過渡期世界という歴史的一時代は米ソを頭目とする戦後世界支配体制をくい破って前進しつづけた民族解放－社会主義勢力とそのまわりに結束した被抑圧民族の闘いを主体的要因とし、新たな段階に突入している。「戦争と革命の時代」－帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命に全世界のプロレタリアート、被抑圧人民、被抑圧民族が手をたずさえ世界革命、

世界プロ独を対置してゆくことが、きわめて実践的な任務として要求される時代、それを巡る国際的党派闘争の時代に我々は生きている。

朝鮮半島はその決定的要たる位置をもつて燃えあがり、朝鮮人民の闘いはその決定的任務を革命的プロレタリアートと共に共産主義者の前につきつけている。今こそ我々は国際主義の総路線でしっかりと武装し、自国帝国主義の朝鮮侵略反革命と対決し、朝鮮人民連帯の闘いの大飛躍をなしとげねばならない。

1970年7月7日、在日中国人青年組織華僑青年闘争委員会による革命的左翼と日本階級闘争への訣別宣言が投げかけられてから6年。「勝手気ままに連帯と言つても、我々は信用できない。日本階級闘争のなかについに被抑圧民族の問題は定着しなかったのだ。……我々は言葉においてはもはや諸君を信用できない。実践がなされていないではないですか。実践がないかぎり連帯といつてもたわごとでしかない。」とする厳しい彈劾の声はその根本において金芝河の我々への呼びかけとまったく等質である。

7・7告発への自己批判は断固として革命的に継承されねばならない。「国際主義と権力問題」の徹底的な深化、それを保障する武装蜂起・プロ独を組織する中央集権非合法党建設という、もつとも核心的な点において「7・7」をうけついできた我々は新たな決意をもつてその重大な責務を全面的にひきうけつけねばならない。7・7自己批判に対する右からの「自己否定主義」だの「自己批判主義」だのという悪罵と反動的逆流がさかまく現在とりわけてそうである。

6年間の歴史的苦闘の一切をかけ、大胆に朝鮮人民との国際主義的連帯をさらに徹底強化せよ！

激動の朝鮮——その世界史的位置

第一章

(1) 朝鮮民族解放闘争の歴史

的地平

うちに新たな到達地平を与えた。そして、獲得された到達点は、被抑圧民族の解放闘争が現下の「革命と戦争の時代」に占める歴史的に形成されてきた革命的位置をますます鮮明にせざにはおかない。それは国際共産主義運動の現在的地位－国際党派闘争、世界単一党建設に深く関わっている。

1975年4月30日、ベトナム全土解放からひき続く中国、朝鮮、インドシナ等のアジア民族解放－社会主義勢力の前進は国際階級闘争の

さてここで、朝鮮人民の闘いの歴史的地位を見ておこう。1917年ロシア革命によつてきてひらかれた現代過渡期世界に朝鮮人民の闘いがはつきりとした位置を闘いとつてゆくのである。

1919年3月1日朝鮮独立蜂起によってである。3・1蜂起とは1875年不平等条約押しつけ以降の日本の本格的な朝鮮侵略が1910年日韓併合といわゆる「武断統治」としてすすめられる中で3月1日を期してまき起つた朝鮮民族による解放と独立をかけた広範な朝鮮全土をほぼ

1年にもわたつてゆるがしつづけた闘いである。この背後には1894年に「斥和洋」をスローガンにした反日の民族運動である甲午農民戦争を組織し、後に反日義兵闘争を展開した王室を侵害する外國勢力に対する武器をとつて徹底抗戦するという封建末期の農民運動と

朝鮮の資本主義の発展に独立を求めた「開化派」の流れをくみ「愛国啓蒙文化運動」等を開闢した民族ブルジョアジーとの反日、独立を合言葉にした結合が存在した。その段階に於てすでに朝鮮民族解放闘争は未だ少数ではあれ、若々しいプロレタリアートと庄倒的多数を占める農民の同盟によって荷われたのである。3・1蜂起を転換期として、民族ブル

ジョアジーは買弁ブルとして日帝とその利害を共にし、朝鮮民族解放闘争が社会主義革命として準備される以外に勝利の道のない新しい歴史的時代が開始されたのである。もはや

3・1蜂起に於る米帝リ・ウイルソンの「民族自決の権利」をただただあてにした「33人の民族代表」はどのような意味でも朝鮮解放闘争の代表たりえず、それにとって代つて若き

ニーは飛躍的に強まつてゆくのである。時あたかもレーニンがコミニテルン2回大会の壇上から「先進の資本主義国の革命的プロレタリアートとプロレタリアートがいかにか、あるいはほとんどのない国の大衆との、また東洋の植民地国が抑圧されている大衆との結合－この結合が本大会でやられている。この結合を強固なものにすることは我々にかかる。我々はこれをやりとげるだろうと私は確信している」（1920年）と主張した時期であった。こうして朝鮮人民の闘い

格を刻印してゆくのであり、それはますます直面する朝鮮民族解放闘争が社会主義革命として唯一、牽引されるべきことを鮮明にしたのである。以降、半ば強制的に日本に連

1976年7月15日

烽火

行させられた在日朝鮮人運動をその一翼としながら、第二次世界戦争下に於る持続的な抗日パルキザン戦争が闘われ、1945年帝の敗戦とともに朝鮮人民は祖国の一たんの解放を手にするのであるが、米帝の南朝鮮居住すわり、1948年国連ハ米帝による李承晩（イ・スマン）を擁立しての南での単独選挙、大韓民国でつちあげ、1950年朝鮮解放戦争から1953年停戦協定締結の中で現在に至る南北分断状況がつくりあげられてゆくのである。朝鮮は米ソによる戦後世界支配体制ハヤルタ・ジュネーブ体制の基礎分断国家としてイケニエに供されたのである。

(2) 朝鮮民族解放闘争は国際共産主義運動の最前線にある

次に我々はこうした朝鮮人民の闘いを強固な一画とする被抑圧民族の、とりわけアジアの民族解放闘争が国際共産主義運動に提起してきた歴史的現在的意義を国際共産主義運動の路線をめぐる世界的な党建設の闘争としてとらえづくさねばならない。それこそが現在アジアがそして朝鮮半島が国際階級闘争と国際共産主義運動の勝利をめぐる激しい革命と反革命の攻防のるっぽと化しているところの根拠だからである。

朝鮮で3・1蜂起が闘われた時代、現代過渡期世界の出発点に於て第3インターナショナルの首領レーニンが鋭く予言した如く、被抑圧民族の民族解放闘争はブルジョア民主主義一般の問題として、あるいは一国的な民族解放問題としてのみ論じられる段階から訣別し、国際共産主義運動の前進と結びついたプロレタリア世界革命の不可欠の要素としての位置を確立した。そして、これにとどまることなく、さらにつき進んだ。

世界帝国主義は先進資本主義諸国に於る小ブルの分子と労働貴族の抵抗と影響力とにうちかった革命的プロレタリアートと殖民地国、半植民地国の被抑圧民族の革命的闘いの結合によって打倒されることなく、1930年代、1945年の二つの革命期に於る先進国革命運動の鎮圧を通して延命し、延命をとげた帝国主義はソビエトロシアを包囲し、スターリン主義者はソ連共産党20回大会（1956年）を機に「平和共生、平和移行、全人民国家」を掲げて、そのスターリン主義の社会帝国主義への屈服一同化として確定し、社会帝国主義に転化した。スターリン主義の社会帝国主義への転化は国際共産主義運動の大分裂を鮮明にし、一方の極に中国共産党を大後方とする帝國主義の新植民地主義支配、強盗的市場再分割戦に対峙する巨大な勢力を誕生させ、これを強めた。この先頭に立ったのがコミニテルン2回大回によつてはじめ、国際共産主義運動に於る発言力をかちえた被抑圧民族内共産主義者の流れ

を継承する中国共産党であり、あるいは不徹底であるとはいえ朝鮮、ベトナム等の労働党、共産党であった。彼等はそして彼等に指導された民族解放闘争は、民族解放闘争をブルジョア民主主義革命ハ反米民族運動一般におしとどめ、民族解放闘争と社会主義革命を切断する事によつて帝國主義と妥協せんとするソ連及先進国共産党と激しく闘つたのである。このような国際共産主義運動の新しい地平はソ連共産党、先進国共産党の変節、武装反革命への転落を不可避に暴露し、国際共産主義運動の最前線に「民族解放ハ社会主義」の旗を掲げるとともに、世界革命戦争、世界プロ独立を組織する世界單一党建設の旗を断固として掲げることを、我々の全てに要求しているのである。それ故に、我々は民族解放闘争の大前進の全面的賛美で日本革命的プロレタリアートの国際主義的任務をすりかかるのではなく、「帝國主義の侵略反革命、社帝の武裂反革命を粉碎し、世界革命戦争ハ世界プロ独立を組織する世界單一党を国際階級闘争の最前线に組織する」任務を、国際共産主義運動の大分裂の下で果さねばならないのである。ともあれ、これら民族解放ハ社会主義勢力は国際階級闘争の最前線に立ちきることによつて米ソの戦後世界支配体制下で帝國主義の新植民地主義支配を窮地におり、帝國主義間対立を促進し、帝國主義の国内、国際危機出しに於ける。米帝のもともと信頼すべき盟友たる我が日帝は自己の体制的危機の反革命的突破の望みを託し、この攻防に南朝鮮を組織するの徹底強化をもつてこたえんとしている。日帝こそ南北統一へむかう朝鮮人民の最大の敵対者である。民族解放ハ社会主義勢力の前進と結合し、日帝の朝鮮侵略反革命を内戦ハノ朝鮮人民と共に我が日本プロレタリア階級は国際主義の経路線を掲げ、闘いを組織せねばならない。

第一章 朝鮮南北統一運動は民族解放ハ社会主義へと向かう

(1) 朝鮮人民の南北統一運動に連帶せよ！

いま、朝鮮人民は、南北をつらぬき、在外なかなか在日朝鮮人運動をその強力な一翼としつつ、帝國主義、社会帝国主義の南北分断固定化策動と対決し、南北統一の勝利の途上にある。3・1朝鮮独立蜂起にはじまる民族の完全な独立と解放をめざすたたかいは、「未完の革命」たる4・19革命をのりこえ、必ずやその完遂を実現するであろう。南北統一の勝利、朝鮮人民の完全な独立と解放は、朝鮮社会主義革命の不可欠の条件である。

北半部を代表する朝鮮労働党は、民族解放一社会主義勢力がすでに到達した地平の上に米日帝ハ朴との熾烈な攻防戦を展開してきた。72年7・4南北共同声明ハ75年中朝共同声明をうちたて、非同盟諸国会議、国連を通じて73年6月23日には、朴のペテン的「南北国連同時加盟提案」に金日成（キム・イルソン）「高麗（コリヨ）連邦共和国」の建設による国連加盟案を対置し、米軍を含む一切の外国勢力の撤退、南での民主政権樹立を前提にし

た南北統一という原則的提唱をおこなつてゐる。「南朝鮮に革命が起きれば一つの民族として携手傍観しない。侵略者は徹底的に消滅させる。この戦争でわれわれが失うものは軍事境界線であり、獲得するものは祖国の統一である。」（昨4・18、金日成演説）我々は直面する朝鮮解放闘争に於けるこの朝鮮労働党の政治方針を以上に述べた立場から断固支持する。

朝鮮労働党を含むアジア民族解放ハ社会主義勢力の勝利の波頭が朝鮮人民の反独裁民主化ハ南北統一運動とがっちりと結合してゆく段階に歴史が突入しはじめたことを朴独裁政権下でたたかう南朝鮮人民はみずから闘いの中にくつきりと刻印しはじめている。南朝鮮人民は「現代の新生国世界の大潮流をなし」という非同盟運動（75年11・19決起文）や、「世界史に新たな力として拾頭した第三世界」（本年3・1民主救国宣言）として、自己の世界史的位置を大胆に押し出し、米、日、朴の「北の脅威論」「勝共統一論」の必死のアジリタてもかかわらず、「反共」が反独裁民主化闘争の最大の武器であり、「北の共産主義者と南の民主主義者の手による連

機を激成してきた。それはヤルタ・ジュネーブ体制の支柱であり、北半部に民族解放ハ社会主義勢力の根拠地を有す「分断国家」であるベトナム、朝鮮とその周辺諸国に於てもその勝利の歴史的橋頭堡であった。ヤルタ・ジュネーブ体制はIMF・ガット体制とともに68年から72年を過渡として崩壊し、ベトナム人は米帝とチューかいらの政権を放逐、打倒し、全土解放と南北統一をかちとつた。同声明、73年1・26ベトナム「停戦」協定は次の国際階級闘争の焦点が朝鮮に移行することは必至であった。

今日米帝は世界帝国主義の存亡をかけ、ソ連社帝との結託を強めつつ、韓国、沖縄を前进基地とする「前進戦略」を日米安保ハ米韓相互防衛条約の連動的強化をもつて具体化し、朝鮮南北分断固定化、朴独裁死守の野望をむき出しにしている。米帝のもともと信頼すべき盟友たる我が日帝は自己の体制的危機の反革命的突破の望みを託し、この攻防に南朝鮮新植民地支配の徹底強化をもつてこたえんとしている。日帝こそ南北統一へむかう朝鮮人民の最大の敵対者である。民族解放ハ社会主義勢力の前進と結合し、日帝の朝鮮侵略反革命を内戦ハノ朝鮮人民と共に我が日本プロレタリア階級は国際主義の経路線を掲げ、闘いを組織せねばならない。

邦制国家の樹立」こそが「統一」への道であるという確信を南朝鮮人民自身の闘いの中で成長させてきたのである。チュー・ヤロンノルの末路は朴の運命に等しいことを南朝鮮人民は、朴が「われわれの共同の敵である共産主義者と闘って勝てなければ全部が死ぬ」という非常な覚悟をもたなくてはならない」と絶叫すればするだけ知りぬくのである。

こうした朝鮮人民の闘いが、帝国主義の世界支配体制の根幹をゆるがさずにおかないと、徹底して恐怖する米帝は、「米軍の韓国からの撤退はアジアからの最終的な撤退を意味する」との決意のもと韓国を最前線にすえ、沖縄をストロング・ポイントとして「朝鮮で北朝鮮が攻撃すれば沖縄からB-52の爆撃により9日間で殲滅」するなる反革命宣言をうちだし、朴政権の護持と米日韓反革命体制の強化の策動を強めている。7・8日米安保協開催をもつての防衛協力委設置、II・日米共同作戦体制構築はその決定的要をなしてい。すでに本年三月二十五日から二八日にかけ、在沖縄米軍第三海兵隊の参加のもとで、米第七艦隊を中心とする「モウレックス」と称した実戦ながらの上陸演習が韓国東海岸でおこなわれた。これは実質的な米日韓共同演習であり、侵略反革命そのものである。

(2) 日帝の南朝鮮新植民地主義支配粉碎！

他方、これと結合した日帝の朝鮮侵略反革命——南朝鮮新植民地主義支配強化の攻撃は、

日帝の存亡と直接的に結びついて「日本民族は36年間の非人間的韓国侵略よりももと狡かつで野獣的な方法でわが民族の生存を脅し人権をじゅうりんしている」（金芝河）と弾劾されるすさまじさで進行している。一九五〇年の朝鮮戦争特需で復興の礎を築きあげてきた日帝は、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制確立の過程に自己を組みこみつつ「高度経済成長」をなしとげ、65年日韓条約をもつて南朝鮮への侵略を本格化するのであるが、ロツキード疑惑で白日のもとにさらされたごとく、この過程は戦犯を再び支配者層の座に返り咲かせ、戦後自民党支配の基本構造をつくり出す過程であった。「日本は伊藤博文の道にしあがつて朝鮮に根をおろさねばならない」（一九六二村吉田茂）という日帝の理念は敗戦直後から一貫したものであり、四八年朝鮮民主主義人民共和国、四九年中華人民共和国成立というアジア民族解放—社会主義勢力の大前進と革命的民族運動の激発という国際的条件、そして敗戦帝國主義としての出発という日帝自身の条件は、日帝をして金芝河の指摘する戦前よりも「もつと狡かつで野獣的な方法」をもつて南朝鮮新植民地主義支配へとつき進ませたのである。岸信介、田中角栄、椎名悦三郎ら韓国ロビーの最有力者らが現実のブル

ジョア政治の決定権をほぼ掘りつくしていることは根拠のあることなのである。そして彼らは今や、73年金大中（キム・テジュン）氏強制致事件、74年太刀川・早川問題、夏の文世光（ムン・セクワン）事件等の発生から收拾の過程を見てみればあきらかなごとく、朴の独裁政治と直接に結びつき、南朝鮮人民の闘いの弾圧を直接に執行する権力さえも手中に入れつつある。

こうした中で、一時的な運動の低滯期を強めているとはいえ、南朝鮮人民のたたかいは依然、持続的で不滅である。本年3月1日独立蜂起57周年のこの日、緊急措置9号下の一片の反政府的行動・言辞をも許さないという戒厳令体制をぶち破って、金大中、咸錫憲（ハム・ソクホン）氏ら民主人士、一二名の連名による「民主救国宣言」が発表された。朴政権は、すぐさま宣言署名者を次々と連行し、一八名を9号違反で起訴した。家族はもちろん弁護士との接見も許さず、公判の傍聴者はK C I Aが徹底的に調べあげる等々の弾圧にもかかわらず、独裁政府の横暴に対しても傍聴券を焼ききて、法廷の前で坐りこみをおこない、デモをし、歌をうたうという闘いが、連行、逮捕の危険をおそれず展開されている。あるいは、昨年11月12日、「学園スパイ団」というデッチ上げにより、不当逮捕され、起訴され、証拠らしい証拠は何ひとつないまま、白玉光（ペク・ウォッカム）、金五子（キム・オジヤ）、金哲顯（キム・チョルヒヨン）、李哲（イ・チヨル）氏ら四名への死刑判決を

第三章

排外主義・社会排外主義を粉碎し、国際主義の武装で朝鮮人民と連帯せよ！

(1) 入管体制と在日朝鮮人運動

日帝の南朝鮮新植民地主義支配の強化は、国内における政治的反動を激成し、金融寡頭支配の確立と結びついた統治形態の転換をともなって進行している。排外主義、社会排外主義の育成、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃を基軸とした歴史的な差別分断支配の強化、労働者人民への徹底した搾取と収奪—そして六五万在日朝鮮人民には、日帝の南朝鮮新植民地主義支配のくびきを強化している。

今日、入管体制は、朴独裁の維新憲法—緊急措置9号体制と直接に連動するに至っている。72年、日帝、朴の維新民団デッチ上げはただちに民団民主派指導者への前代未聞の反共法適用へ連なり、74年、計画的に演出された朴そ撃事件は「椎名メモ」—反朴团体への実質的破防法適用策動へと帰結した。75年11月、在日韓国人留学生・青年への大量弾圧

ふくむ極刑、重罪判決をうけた一八名の在日韓国人留学生・青年に対する支援の闘いが獄中の学生、青年を先頭に不屈にたたかわれている。

一九六〇年四・一九の李独裁政権打倒の闘いをうけつき、七三年一〇・ニソウル大生決起以降、爆發的ないきおいをもつて展開されたこの南朝鮮人民の反独裁民主化闘争は、第一に、労働者、農民、都市貧民層の利益に立脚した、民族の悲願たる南北統一を中心とする民族運動であり、この勝利が朴を擁立した米日帝の支配の転ぶくと、米日朴一ソ連社帝の「クロス承認—南北分断固定化策動」との根底的対決をぬきにしてはありえないこと。

第二に、それは不可避に四・一九革命によつてうちたてられた「四反理念—反封建、反外勢、反買弁、反独裁」の深化をもつて民族解放—社会主義勢力との歴史的接近を実現せずにはおかないこと。第三に、それは、朴独裁政府打倒の闘いの前に立ちふさがる最大の敵、米帝の軍事支配と日帝の新植民地主義支配を、わが日本プロレタリアート人民と共に粉碎することを極めてさせまつた課題として日程にのぼせていること。——これらをつきだしてうかたてられた「四反理念—反封建、反外勢、反買弁、反独裁」の深化をもつて民族解放—社会主義勢力との歴史的接近を実現せずにはおかないこと。第三に、それは、朴独裁政府打倒の闘いの前に立ちふさがる最大の敵、米帝の軍事支配と日帝の新植民地主義支配を、わが日本プロレタリアート人民と共に粉碎することを極めてさせまつた課題として日程にのぼせていること。——これらをつきだしてうかたてられた「四反理念—反封建、反外勢、反買弁、反独裁」の深化をもつて民族解放—社会主義勢力との歴史的接近を実現せずにはおかないこと。第三に、それは、朴独裁政府打倒の闘いの前に立ちふさがる最大の敵、米帝の軍事支配と日帝の新植民地主義支配を、わが日本プロレタリアート人民と共に粉碎することを極めてさせまつた課題として日程にのぼせていること。——これらをつきだしてうかたてられた「四反理念—反封建、反外勢、反買弁、反独裁」の深化をもつて民族解放—社会主義勢力との歴史的接近を実現せずにはおかないこと。第三に、それは、朴独裁政府打倒の闘いの前に立ちふさがる最大の敵、米帝の軍事支配と日帝の新植民地主義支配を、わが日本プロレタリアート人民と共に粉碎することを極めてさせまつた課題として日程にのぼせていること。——これらをつきだしてうかたてられた「四反理念—反封建、反外勢、反買弁、反独裁」の深化をもつて民族解放—社会主義勢力との歴史的接近を実現せずにはおかないこと。第三に、それは、朴独裁政府打倒の闘いの前に立ちふさがる最大の敵、米帝の軍事支配と日帝の新植民地主義支配を、わが日本プロレタリアート人民と共に粉碎することを極めてさせまつた課題として日程にのぼせていること。——これらをつきだしてうかたてられた「四反理念—反封建、反外勢、反買弁、反独裁」の深化をもつて民族解放—社会主義勢力との歴史的接近を実現せずにはおかないこと。第三に、それは、朴独裁政府打倒の闘いの前に立ちふさがる最大の敵、米帝の軍事支配と日帝の新植民地主義支配を、わが日本プロレタリアート人民と共に粉碎することを極めてさせまつた課題として日程にのぼせていること。——これらをつきだしてうかたてられた「四反理念—反封建、反外勢、反買弁、反独裁」の深化をもつて民族解放—社会主義勢力との歴史的接近を実現せずにはおかないこと。第三に、それは、朴独裁政府打倒の闘いの前に立ちふさがる最大の敵、米帝の軍事支配と日帝の新植民地主義支配を、わが日本プロレタリアート人民と共に粉碎することを極めてさせまつた課題として日程にのぼせていること。——これらをつきだしてうかたてられた「四反理念—反封建、反外勢、反買弁、反独裁」の深化をもつて民族解放—社会主義勢力との歴史的接近を実現せずにはおかうこと。

このような攻撃は祖国のたたかいと結合した、在日朝鮮人運動の前進、先駆性に対する政治的压殺をねらってうちおろされる（そもそも入管体制が在日朝鮮人の政治活動の規制、

烽火

む民族解放闘争である。我々と在日朝鮮人運動の団結の基軸は「統一」問題にこそある。したがって我々は一方で、日米帝ソ連社帝の南北分断固定化策動、その要たる日帝の南朝鮮新植民地主義支配—沖繩侵略反革命前線基地強化との対決・打倒のたたかいを基盤に他方、在日朝鮮人運動がますます強く祖国のたたかいと結びつき統一運動として発展してゆくあらゆる要素を防衛し、統一へのあらゆる攻撃、組織破壊を粉碎してゆかなければならぬのである。そして統一への革命的連帯を基礎とし、唯一そのもとに在日朝鮮人民の祖国への自由往来、正当なる法的地位、民族的・民主的諸権利の要求を支持し、この実現のために力を注がねばならない。

(2) 朝鮮人民連帯闘争と党派 闘争の勝利

争への小ブルの贊美を日本プロレタリアート人民の國際主義にすりかえる日和見主義であり、第二に、「朴の支持に固執すればするほど帝国主義の陣営は、今日の現状維持的平和共存外交路線との矛盾を深めざるをえない」（四トロ）とする帝国主義の朝鮮侵略反革命との闘争からの逃亡者であり、第三に、「日韓癒着」「自民党内紛」のちみつな暴露と組合運動の結合が権力問題であるといいくるめる経済主義者である。彼らは、ベ平連運動の再版と、そこでのヘゲモニーあらそいを夢想する輩であり、日本プロレタリアート人民の国際主義的任務を「支持・支援」に低め、武装解除を要求する部分である。

またこれらのがいだで特別な位置をしめているのが、革マル主義への水先案内人、反革命II加納一派である。彼らは一年前、わが同盟からの脱走時に「日本プロレタリアートと朝鮮人民との連帶・結合の条件は、資本主義の国際性・世界性の中に存在しており、それが、朝鮮人強制連行ですら諸民族の不可避の融合という点から見て進歩的である」と悪名高き「強制連行万歳論」を主張し、プロレタ

(3) 朝鮮人民連帶闘争を共産主義運動の飛躍をかけて闘え！

我々は、このような朝鮮問題をめぐって開始された階級的流動と政治的分解を激しい党派闘争のうちに対象化しきらねばならない。60年代後半、ベトナム民族解放闘争との連帯の中で問われた問題が、今日、インドシナにおけるたたかいの一担の勝利を基盤にして、より大規模で、より緊迫性をもつてわが日本共産主義運動につきつけられている。朝鮮人民の南北統一のたたかいは、我々に「支持・支援」のみでとどまることを要求しているのでもなければ、一切を日帝打倒へときりちぢめることを要求しているのでもない。

現在の日米帝の侵略反革命——南朝鮮新植民

(3) 朝鮮人民連帯闘争を共産

我々は、このような朝鮮問題をめぐって開始された階級的流動と政治的分解を激しい党派闘争のうちに対象化しきらねばならない。60年代後半、ベトナム民族解放闘争との連帶の中で問われた問題が、今日、インドシナにおけるたたかいの一撃の勝利を基盤にして、より大規模で、より緊迫性をもつてわが日本共産主義運動につきつけられている。朝鮮人民の南北統一のたたかいは、我々に「支持・支援」のみでとどまることを要求しているのでもなければ、一切を日帝打倒へときりちぢめることを要求しているのでもない。

た朝鮮人民の反独裁民主化闘争は、民族革命的發展をとげざるほかはない。同時にこのことは、朝鮮人民が南北統一の実現を当面するもつとも重大な政治的任務としながら、その実現は、朝鮮における社会主义革命樹立のたたかいと不可避に結合することを要求していることを意味している。この事実は、日米帝

アリア国際主義を「資本主義の進歩性の認識」にすりかえ、共産主義運動の目的意識性を骨ぬきにし、帝国主義の支配を美化する点に自己の任務を定めた。現在、こうした本質は何らかわることなく逆に倍化し、本年、4・28鬭争に「5・1メーデービラまき」を対置したように、ますます排外主義的性格を強めているのである。

我々は、これら右翼日和見主義者の拾頭を粉碎し、反革命＝加納一派の完全打倒を必ず戦取せねばならない。

さて、こうした右翼日和見主義に対する一定の戦闘的位置をもちつつ、「宣戰布告なき侵略戦争の事実上の開始－朝鮮侵略粉碎鬭争」を提起する中核派は、かつての、7・7自己批判－血債の思想－暴動鬭争の路線的破たんを、反帝反スタ世界戦略の強調と統合によつて突破せんとしている。だがしかし、彼らは現代過渡期世界における民族解放鬭争の歴史的・現在的把握がなしえず、民族解放鬭争が資本主義を通過することなく社会主義を実現してゆく歴史的段階をまったく無視し、「民族解放－革命戦争」規定として、結局は民族解放鬭争との連帶の基準を、帝国主義に対するその戦闘性の評価の中にしか求められないのである。したがつて彼らの言う、南のたたかい＝プロレタリア革命の具体的形態、金日成＝スターリニスト＝南のたたかいへの裏切り、とする「南北分断打破＝革命的統一」論は、まったく現実的でないばかりか、問われ日本共産主義運動の、日本階級鬭争の国際主義的任務を鮮明にするものではありえない

の朴独裁死守・南北分断固定化攻撃——そしてこれに呼応するソ連社帝のアジア集団安保・南北クロス承認策動を通した民族解放—社会主義勢力への反革命的介入という、帝国主義、社会帝国主義の十字砲火を朝鮮人民とともに粉碎し、国際共産主義運動と国際階級闘争の次の新たな段階をきりひらくことを我々

日夜、階級闘争の最前線で闘っている革命的労働者、学生の皆さん！ 烽火愛読者の皆さん！

電通労働者政治委員会は、あの反革命—加納一派が電通労働者政治委員会から逃亡して以降、一年有余に渡り、単なる組織継承、再建活動一般としてではなく、文字通り電通労働者政治委員会の革命的再建を、政治路線、組織路線を一对のものとし、総路線の確定を基軸とした強固な組織建設を獲得すべく指導部の確立をこの間闘い取つて来た事を報告し、電通労働者政治委員会のアピールと闘う決意にかえていきたいと考えます。

電通労働者政治委員会の指導部として一時的にあれ許してきた反革命—加納一派は、昨年春、分派闘争の過程の中で電通労働者政治委員会をも姑息な政治でもって自らの右翼的路線の下へ統合せんとしたが、路線をめぐるその指導内容の誤りを見抜かれた彼らは、こそこそと逃亡したのである。その後、彼らは「我々は、産別の狭い視野から克服する」と言つて「全国労政」を僭称したが、その内実は、彼らの路線からすれば必然なことだが、彼らの活動とは、革命的プロレタリアートの基本的任務である、すなわちプロレタリアートの武装蜂起—プロレタリア独裁に向けた階級闘争として組織するのではなく、その「革命」の学習会運動、認識運動として、図々しくもマルクス・レーニン主義をよそいながら、その革命性を骨抜きにし、こそこそと労働者に「革命」思想を説教して回つていたのである。しかし「全国労政」も発展的解消として何の総括もなく（加納一派の如き清算主義、説教師にとつては総括など必要でない）突如として解体したが、すでに読者の皆さんは御存知のように、プロレタリア編集委員会なる赤軍派からの清算主義（最も右派）と野合し「共産同（紅旗）派」と名乗り、バラ色の「平和綱領」なるものを、万歳三唱と合せて恥かしげもなく労働者・大衆の前にさらけだしたのである。このような「平和綱領」などは、現実の階級闘争の煮つまりの中で、ブルジョアジーとの非和解的な死闘を日夜闘つ

反革命集團加納一派を完全打倒し、 プロレタリアートの大道を進撃せよ！

電通労働者政治委員会

に要請せずにはおかないと。日米帝の朝鮮侵略反革命戦争体制は、沖縄—韓国をむすぶ臨戦体制として一触即発の様相を呈しており、世界帝国主義の危機の深さは、侵略反革命（戦争）によってしか朝鮮社会主義革命を粉碎することができないという極限的状況を不可避免ならしめている。

ている革命的プロレタリアートから見れば、季節はずれのオバケのようなものであり、こういう事は社会排外主義者Ⅱ日共にまかせておけばいいことであり、何んのなしにもならない代物である。又、何よりも加納一派はプロレタリアートの権力奪取—プロレタリア独裁樹立へと指導しなければならない革命党の任務を、労働組合運動への支援へと落し込めんとした典型的な解党主義であり、一切の政治理闘争から召還した加納一派の最後の逃げ道である労働組合運動に於いても、そこへの逃げ込を我々は決して許はしない。加納一派のみごとなまでの経済主義・組合主義の露骨な現われは、昨年より闘われている電電公社の「障害者」就職差別糾弾闘争に於いても、「公社は差別を認めなくともよい。問題は入社してからだ。」といった、おどろく程の融和主義ぶりや、又、最近に於いては「電通民主とか、逃亡を許すなどとは刺激を与えるのないわいでおこう。」というよう、民同の右翼日和見主義潮流の最先頭を真っしぐら突き進んでいる。それ故、我々は加納一派の如き右翼日和見主義・解党主義を温存せしめた組織の、そして、指導部の組織総括をかけて路線をめぐつての闘争として、基本的に勝利し、貫徹してきた事を明らかにしておきたくもつてどうしようもない輩であり、抬頭する

かかる情勢の中にあって日帝は、帝国主義の朝鮮侵略反革命には内戦をもつてこたえ、社会主義革命戦争の主戦場たるアジアでの唯一大陸をかけて、軍事強化を背景に南朝鮮植民地主義支配の強化を急ピッチに押し進め、ソンドンに封じこめんと米帝との反革命同盟の命運をかけて、軍事強化を背景に南朝鮮植民地主義支配の強化を急ピッチに押し進め、朝鮮半島への民族解放—社会主義革命の波及の阻止の布陣をひいている。日米安保を軸に日米韓反革命体制の要としての沖縄侵略反革命前線基地の徹底した打ち固めを初め、国内プロレタリアートを排外主義で包囲し、侵略反革命に向けて大動員しきらんとし、それに真向から敵対し、ブルジョアジーとの非和解的闘いを押し進める革命党・革命的プロレタリアートに対する暴力装置を前面におしだしての官僚的警察的独裁という統治形態の転換をとげつつ弾圧攻撃をかけ、政治闘争への決起を封じこめんとしている。

このような日帝の攻撃の中では、日共の排外主義政権構想と、それへの良きパートナーとして、日々合流を開始している右翼日和見主義諸派、とりわけあの反革命—加納一派を始め、四トロ、プロ青、日向等の抬頭という中において、我が電通労働者政治委員会は日本プロレタリアートの、その国際主義的任務として、全面的な政治暴露の主導を、

わが日本プロレタリアート人民は、帝国主義の朝鮮侵略反革命には内戦をもつてこたえ、排外主義・社会排外主義・右翼日和見主義を粉碎し、朝鮮人民・在日朝鮮人民との国際主義的連帯を、国際共産主義運動、国際階級闘争の大前進のうちに戦取せねばならない。

かかる情勢の中にあって日帝は、帝国主義の朝鮮侵略反革命には内戦をもつてこたえ、社会主義革命戦争の主戦場たるアジアでの唯一大陸をかけて、軍事強化を背景に南朝鮮植民地主義支配の強化を急ピッチに押し進め、ソンドンに封じこめんと米帝との反革命同盟の命運をかけて、軍事強化を背景に南朝鮮植民地主義支配の強化を急ピッチに押し進め、朝鮮半島への民族解放—社会主義革命の波及の阻止の布陣をひいている。日米安保を軸に日米韓反革命体制の要としての沖縄侵略反革命前線基地の徹底した打ち固めを初め、国内プロレタリアートを排外主義で包囲し、侵略反革命に向けて大動員しきらんとし、それに真向から敵対し、ブルジョアジーとの非和解的闘いを押し進める革命党・革命的プロレタリアートに対する暴力装置を前面におしだしての官僚的警察的独裁という統治形態の転換をとげつつ弾圧攻撃をかけ、政治闘争への決起を封じこめんとしている。

このような日帝の攻撃の中では、日共の排外主義政権構想と、それへの良きパートナーとして、日々合流を開始している右翼日和見主義諸派、とりわけあの反革命—加納一派を始め、四トロ、プロ青、日向等の抬頭という中において、我が電通労働者政治委員会は日本プロレタリアートの、その国際主義的任務として、全面的な政治暴露の主導を、

和見主義の合流を粉碎せよ！

◆ 南朝鮮新植民地主義支配—沖縄侵略反革命前線基地粉碎！ 安保粉碎／日帝打倒！ 裁文配粉碎！

◆ 杜共排外主義政権構想を打碎き、右翼日和見主義の合流を粉碎せよ！

◆ 日帝の侵略反革命の要／官僚的警察的独裁文配粉碎！

として、その最前線にかかげ、労働者階級の真只中に、全国政治闘争として、革命的プロレタリアートの真紅のヘルメット部隊を組織してきたのである。又、全国政治闘争の組織化と共に、加納一派との闘いを組織的全結着をかけ、諸実践を総括しなくてもよいという立場を組織的に粉碎しつくものとして組織しつづけ、階級闘争の全ての戦線からのたたきだしと、これらの闘いを通じて電通労働者の確固たる指導部中枢として確立してきたのである。又、我々は組織活動上の一つの武器である機関紙「陣型」の復刊を勝ち取り、鮮明な路線的立場を提示し、労働者・大衆への

火 烽

の前に、敵国家権力―裁判所―検察に対し、千葉中央署での密室裁判―密室審理を要求していた加納一派の手先、久松友子（加納英二の妻）は、その目論みが粉碎されるや、本第四回公判においては裁判所―検察と一体となって大量の裁判所廷吏、私服警官の動員に守られ出廷した。しかしながら、我々の一連の加納一派完全打倒闘争と、法廷における対峙の前に反革命デッチあげ証言を行なうことができず、裁判長―検事の「打ち合わせと違う」という動搖と追求の前に「不安で眠れない。子供の事が心配で」とヨヨと泣きくずれるという、全くの茶番劇を演じたのである。

反革命証言は粉碎された。しかし、この久松友子の「証言拒否一身の安全が保障されない」は、第一に我同盟が「何をするかしれない極悪人」とする「殺人未遂」デッチあげを補強するものであり、（ちなみに、今回加納一派は本田はじめ四人のメンバーを私服警官と並んで地裁前にうろつかせ、「ガードマンが必要なんです。助けて下さい」とばかり、同盟（全国委）の党内分派―党派闘争の破壊・歪曲に奔走したのである）第二に、久松友子―警察権力によって捏造されているところの「供述調書」のデッチあげ暴露をかわさんとするものであり、我々は全く証拠能力のないこの久松友子のデッチあげ「供述調書」の法廷への提出を断固許してはならない。

かかる反革命加納一派を手先とした警察―検察の「殺人未遂」デッチあげ―組織破壊攻撃は、二人目の「証人」城戸同志を不当逮捕した高橋茂典への検事の「久松友子は當時何と言つたか」なる問い合わせに「確かに犯人だ、と言つていた」とするやりとりにも鮮明であった。しかし我同盟建設の闘いは権力―反革命の目論みを許しません。高橋の「任意同行一面向し―逮捕」が全く不当であり、久松友子の発言も実は直接聞いたものではないことがただちに暴露されたのである。なにがなんでも久松友子の「発言」を法廷にひきずり出し、城戸同志を「殺人罪」にデッチあげんとする検事は、「発言を直接聞いた」とする沢口なる警官を証人申請し、その場をとりつくろった。

このような権力の「殺人未遂」―組織破壊攻撃との直接対峙を、激しい獄中闘争として闘い抜いている今村・南波・城戸三同志は、九ヶ月に及ぶ不当長期拘留をものともせず、この日元気な姿で法廷に登場し部隊と共に公判闘争を貫徹した。一〇人を越える拘置所員、それを上まわる廷吏・私服の配置の中で、久松友子・高橋の反革命証言を粉碎し、反革命加納一派完全打倒闘争勝利！裁判闘争勝利！獄中闘争貫徹！三同志尊還！を固く意志統一したのである。

次回第五回公判は七月一九日、検察官が今回新たに申請した「証人」沢口と、デッチあげ診断書を書いた三人の医者の証人尋問が行

なわれる。反革命加納一派上原・高瀬・伊藤・片桐らは、救急病院の診断書ではあきたらずわざわざ刑事に願い出、同道して千葉大病院まで診断書をもらいうけにいったのである。権力は、この反革命加納一派の「被害届け」をここぞとばかりに「瀕死の重傷」に見せかけ、「殺人未遂」攻撃を完成させんとしているのである。かかる「診断書」のデッチあげを我々は断固粉碎せねばならない。

全国の労働者・学生の皆さん！

権力はすでに実質的実刑として九ヶ月間の

不當拘留をかけており、更には「殺人未遂」のデッチあげ起訴によって、権利保釈を封じ込め実質的実刑攻撃をかけ、同時に高額保釈金の攻撃をしかけてきている。権力による同盟（全国委）党内分派闘争への介入―組織破壊攻撃を粉碎し、三同志即時尊還を戦取せよ！反革命集団加納一派を完全打倒し、同盟（全国委）「中央集権非合法党建設」に決起せよ！

三同志即時尊還の三百万円カンパを！

夏期一時金一千万円カンパの要請・共産主義者同盟（全国委）

全国の革命的労働者・学生・市民諸君！

「烽火」読者諸君！

共産同（全国委）は、同盟再建の闘いの更なる前進に向け夏期一時金一千万円カンパを要請します。

戦後ヤルタ・ジュネーブ体制を崩壊に導いた民族解放―社会主義勢力の更なる前進は、世界帝国主義の侵略反革命との真向うからの対決を通じ、文字通り、現國際階級情勢を「革命と戦争の時代」として現出させています。

こうした中で、中ソ論争を媒介としながら民族解放―社会主義勢力の前進を支えてきた中国共産党の日米安保肯定論に見られる、國際党派闘争上の決定的限界の露呈の中で、日米両帝国主義の死活をかけた攻撃と、民族解放―社会主義勢力の闘いが、朝鮮半島を主戦場として煮つまりをみせてきており、日帝足下の我が革命的プロレタリア・人民の國際主義の真価を真向うから問題解決、天皇制・天皇制イデ攻撃を頂点とした、官僚的警察的独裁の強化として統治形態の転換をおしすすめています。

こうした中で、日共、社会党を始めとする既成左翼は社会排外主義者として我々の闘いの前に立ちはだかり、排外主義政権構想でもって、プロレタリア・人民をその下に集約せんとし、一方、反革命革マルは言ふに及ばず四四〇、日向、プロ青等の右翼日和見主義者共のそれへの大合流がはじまっています。

我が同盟（全国委）は、日帝の侵略反革命社会排外主義者との闘いを唯一に、『革命と戦争の時代』に勝利し、プロ独樹立を戦取する真の革命党建設として、プロ18年の歴史をその下に結着づける闘いを貫徹してきました。72年、同盟（全国委）結成以降の党内一分派―党派闘争の貫徹は、

伊集院一派の12-18路線への単純先祖帰りを暴露し、彼らと一度は徒党を組んだ園内グループは労働者サークルへと転落し、同盟（全国委）からの最悪の脱走分子II加納一派は、赤軍派からの清算主義者「プロ編」と野合し、「红旗」として右翼日和見主義者の革マル主義への水先案内人として、現代カウツキー主義者として、もはやブントとは全く無縁の説教坊主へと転落させたのです。そしてあの悪臭ファンパンたる永井グループは、カストリ雑誌屋としても成り上がりず、歴史のくずかどに放逐したのです。

しかし、この一連の党内一分派闘争は、決して偶然の事ではなく、前述した帝国主義足下の、眞に國際主義を担い、プロの武装蜂起―プロ独樹立を戦取しうる革命党建設の闘いとして貫ぬかれたのであり、我々がすでに明らかにしてきた総路線の下に、中央集権非合法党建設として戦取する闘いだったのです。その為には、我々は多くの議性も余儀なくされたのです。権力・政治警察は、眞先に同盟（全国委）党内闘争に攻撃をかけ、誰が権力にとって恐怖する存在なのかを露骨にし、9-30天皇訪米阻止闘争を始めとする闘い、一連の加納一派完全打倒闘争へ介入し、我が同盟（全国委）へ徹底した集中弾圧をかけ、いまだ三名の同志を「殺人罪」にデッチ上げ、九ヶ月にわたって獄中につなぎ、実質的な実刑攻撃を行なつてきています。

しかし、我々はこうした権力の組織破壊攻撃に対し、断固たる反撃を既に開始しており、更に、加納一派完全打倒闘争の貫徹の下に「武装蜂起とプロ独を組織する中央集権非合法党建設」に勝利する闘いに着実に前進していることを明らかにします。

全ての革命的労働者・学生・市民諸君に我が同盟（全国委）に結集し、共に闘いに決起する事を呼びかけ、同時に獄中三同志尊還と、今秋、安保・沖縄・日韓闘争、三里塚鐵塔決戦、狹山最高裁決戦の大爆発を戦取する為、そして同盟（全国委）再建の大前進に向けて、夏期一時金一千万円カンパの完全達成を要請します。